



TITLE:

クルト・マンデルバウム『ドイツ
社会民主党内の帝国主義論争(1895
- 1914)』(1926)

AUTHOR(S):

保住, 敏彦

CITATION:

保住, 敏彦. クルト・マンデルバウム『ドイツ社会民主党内の帝国主義
論争(1895 - 1914)』(1926). 経済論叢 1967, 100(6): 608-619

ISSUE DATE:

1967-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/133236>

RIGHT:

經濟論叢

第100卷 第6号

日本製造工業の労働生産性の水準……………	行 澤 健 三	1
基準標準原価計算思考について……………	野 村 秀 和	20
国家論から見た社会政策論争……………	石 田 傳	42

書 評

クルト・マन्दェルバウム

『ドイツ社会民主党内の帝国主義論争

(1895—1914)』(1926)……………保 住 敏 彦 60

經濟論叢 第99卷・第100卷 総目録

昭和42年12月

京都大學經濟學會

《書評》

クルト・マンデルバウム『ドイツ社会民主党内の帝国主義論争 (1895—1914)』(1926)¹⁾

保 住 敏 彦

I はじめに

戦後、ドイツではもちろん、わが国でも「ドイツ社会民主党」²⁾に関する研究が、かなり活潑におこなわれるようになった。これらの研究は、それが問題とする時代については、第1次大戦以前の時期から、19年のドイツ革命を経てワイマール共和制に至る多様性に富んだ時代の、一部または全体を含んでいるし、研究の具体的内容については、研究方法の違いに応じて、ドイツ社会民主党（以下 SPD と略す）内の帝国主義論や唯物史観に関する論争を取り扱った理論史的ないしは思想史的研究から、SPD の運動をドイツの労働組合運動や政治状況と結びつけて論じた運動史的研究まで含んでいる。このように多岐にわたっているため、SPD 研究史を概括することは非常に困難である。しかしながら、戦後の研究が依拠している重要な資料に、ドイツ革命からワイマール共和制にかけての時期に書かれた SPD 研究史があり、この時期にはドイツ革命の挫折の原因を SPD の体質のなかに求めるという問題意識から、研究がおこなわれたのである³⁾。このマンデルバウムの著作も、そうした、ドイツ革命挫折の原因を SPD なくなく中央派の体質に求める、ルクセンブルグ主義の立場から行なわれた研究の1つである。

この著作は、著者マンデルバウムが、フランクフルト・アム・マイン大学の哲学科の博士号を獲得するために提出した学位論文である。著者は1901年11月13日にシュペーインフルト・アム・マインに生まれ、当地の国民学校、人文高等学校で学んだのち、1922

1) Kurt Mandelbaum, *Die Erörterungen innerhalb der deutschen Sozialdemokratie über das Problem des Imperialismus (1895-1914)*, 1926.

2) Sozialdemokratische Partei Deutschlands (SPD).

3) その1つの例は、Kurt Brandis, *Die deutsche Sozialdemokratie bis zum Fall des Sozialistengesetzes*, Leipzig, 1931, である。

年以來、ヴェルツブルク、ミュンヘン、ベルリン、フランクフルト・アム・マインの各大学において、経済学、哲学及び社会学を学び、これらの学科を1926年にフランクフルト・アム・マイン大学において修了している。著者のその後の生涯及び著作については詳らかではない。

本書の特色は、まず第1に、SPDの矛盾をその第1次大戦への対応の仕方に見求め、この矛盾の根拠をSPD史を内在的に追求することによって、探りあてようとする点にある。第1次大戦が勃発した時、SPDは政府が帝国議会に提出した軍事公債案に賛成し、『城内平和』のスローガンのもとに階級闘争を終戦まで延期することを宣言し、こうして帝国主義戦争に追従した。ところで、何故SPDが戦争に対してそのような態度をとるにいたったのかという問題については、レーニンやルクセンブルクもSPD指導部の裏切りとするのであって、積極的にそうした対応の原因をSPDの体質にまでさかのぼって追求することはなかった⁴⁾。たとえば、ルカーチは1924年に「戦争にたいする社会民主党の態度は——一時的な——錯誤、臆病などの結果ではなく、それまでの発展の必然的な結果であった。したがって、こうした態度を労働運動の歴史から理解すべきだということ、この態度を社会民主党内のそれまでの『意見の相違』(修正主義、等々)との関連において論ずべきだということ……この観点は、マルクス主義的方法にとっては自明のことにちがいがなかったのであるが、労働運動の革命的な部分においてすら、なかなかひろがらなかった。⁵⁾」と、その間の事情を評価している。ところが、正に本書は、SPDの戦争に対する態度を14年までのSPDの必然的な発展の結果として考察するという観点から、1895年以後1914年までのSPD内部の帝国主義論争を取り扱っているのである。

本書の第2の特色は、帝国主義論に関する著者特有の研究方法である。従来のSPD内の帝国主義論についての研究は、各々の理論家の帝国主義論を彼の実践やその当時の社会状況から切りはなして、それだけ取り出し、レーニン『帝国主義論』を基準にしてそれを断罪するか、あるいは逆に、個々の帝国主義論の理論内容を深く検討せず、その理論家の政治的実践から評価を下してしまうというものが多かったように思われる。

4) レーニン「第二インターナショナルの崩壊」『全集』第21巻；R.ルクセンブルク「インターナショナルの再建」『選集』第3巻。

5) ルカーチ著、渡辺寛訳『レーニン論』p. 58。

こうした研究方法では、はじめに正統として前提したもの以外の帝国主義論がもっている、理論的意義や歴史的意義は明らかにされないだろう。ところが、マンデルバウムは SPD の帝国主義論争を取り扱うさいに、個々の帝国主義論を単に経済理論の地平だけでなく、論争の社会的背景や、その帝国主義論を基礎として帝国主義に対応していった主体の実践的側面を追求し、こうして、個々の理論家や政治潮流の帝国主義に対する理論的認識と実践的態度との総体を解明する。このことによって始めて、それらの理論家なり政治潮流が歴史的に正しく位置づけられるであろう。この帝国主義論の経済学史でないしは社会思想史的研究方法とも言うべき方法でもって、SPD 内の帝国主義論争の内在的研究を行なっている点が、本書の方法上の特色と言えるだろう。

最後に、著者の立場は何であり、またこの著作において彼は何を狙っているのだろうか。著者は、'14年以前の SPD の諸分派の意見対立について、修正派と「マルクス主義正統派」（中央派）との間に深刻な理論上実践上の対立があったという当時の通説に対して、「ただ極左派と党多数派との間にのみ鋭い区分線がひかれていた」⁶⁾と主張する。著者の研究は、SPD 内の帝国主義論争を素材として、この命題を証明しようとするものだとも見ることができる。とするならば、彼の立場は、修正派や中央派とは異なり、帝国主義に対決し社会主義革命を志向した左派の立場であると言えよう。著者はこの立場にたつて、SPD 内の諸分派が帝国主義に対してとった理論的ならびに実践的態度の同一性と差異性とを明らかにすることにより、諸分派の対立と同盟の関係を明らかにし、14年の SPD の戦争に対する態度を規定した事情を解明しようとしたのである。

ロシア革命が勝利したのに対して、ドイツ革命が敗北したこと等の事情のために、SPD の理論や実践は、これまで低く評価されてきた。にもかかわらず、SPD の歴史には豊富な理論上および実践上の問題点が含まれているからには、研究することが放置されてよいものでは決してない。ことに、帝国主義に対する理論的認識と実践的態度をめぐる SPD 内部の諸論争は、帝国主義論史研究の重要な対象領域であるが、これまでわが国ではあまり研究されなかった。本書は、すぐれた視点と方法をもって、SPD 内の帝国主義論争を真正面から取り扱っているという点で、貴重な意義を持っている。しかも、本書は、各々の理論家の著書や党大会での発言、新聞雑誌等の直接の資料に基づいて、論述を展開しており、その資料の豊富さと確かさの点で、今後の SPD 内の帝国主

6) Mandelbaum, a. a. O., S. 17.

義論争研究の手がかりを与えてくれるものと思われる。

Ⅰ 戦前期 SPD の性格と党内諸分派

論文は、第1章「戦前期におけるドイツ社会民主党の性格と党内諸分派」、第2章「ドイツ社会民主党の外交政策問題に対する一般的態度と帝国主義論争における修正主義者の立場」、第3章「党中央派と左派の帝国主義分析」、第4章「中央派の政策と左派の政策」の4章より成っている。各章の論理的構成はこうである。第1章では、戦前期 SPD の性格と党内諸分派の特徴などの著者の SPD 像が示される。第2章以下では、この SPD 像を前提として諸分派の帝国主義や民族問題、戦争等に対する理論的認識ならびに実践的態度が検討される。このばあい、第1章での SPD 像は、第2章以下での帝国主義論争研究の前提であると同時に、逆に第2章以下の研究に媒介され、確証されているのである。

まず、著者は戦前期 SPD の性格とそれが成立してきた歴史的根拠を明らかにする。戦前期 SPD の特徴としては、党の統一と安全のために組織第一主義と革命的危機を待機する待機主義をとったこと、ドイツ社会の民主的改革と社会政策の実施を目的として議会主義の立場に立ち、ユンカーに反対する自由主義的態度をとったことなど、これまでさまざまに評価されてきた⁷⁾。著者もまたそうした点を指摘しつつ、特に SPD の性格の特徴が全体としては、理論と実践との関係があいまいで、つながりをもたない点にあると見なしている。すなわち、「党の公認の理論は、プロレタリアートの将来の使命や、資本主義が『自然必然的に』崩壊し、未来社会が確実に到来するという考えを、放棄しようとしなかった」⁸⁾のに対して、その実際に行なっている実践上の態度は、「労働組合や政治組織の漸次的な勢力拡大」⁹⁾とか「合法的議会主義的活動と改良的日常活動」¹⁰⁾に限られていたのであり、革命的外観を持った理論と改良主義的な実践とが分裂したまま共存していたのである。このため、SPD は外見的には「革命的急進主義」の党と見られながら、その実は改良主義の体質を持っていたのである。

7) 組織第一主義については、K. Brandis の前掲書。自由主義の立場については、J. H. Fränkel, *Die deutsche Arbeiter und die Handelspolitik*, (Dissertation, Frankfurt am Main, 1931)。

8) Mandelbaum, a. a. O., S. 14.

9) *Ibid.*, S. 6.

10) *Ibid.*, S. 11.

ところで、この SPD の性格はどのような歴史的根拠から生じてきたのだろうか。まず第1に、ドイツ労働運動創始期以来のラサール主義的伝統が SPD の内に残っていて、民主的改革と社会政策のための実践を重視しようとする考え方が根がっており、マルクス主義はただ断片的に党の上層部に受容されただけであったという事情である。更に、社会主義者鎮圧法の時代を経て党が議会に進出するにつれて、党指導部は小ブルジョア的選挙民階層の民主主義的要求を考慮することと、労働者党員の急進的分子の願望を考慮することとの2つの課題を果さなければならなくなり、そのため現実の政策とタテマエとしての党の公認の理論との間のギャップは大きくなった。最後に、SPD 及びそれと関係の深い自由労働組合の中に官僚制が発達し、それが党を支配するにいたったため、この官僚制のもつ保守的な傾向が SPD の実践の改良主義的合法主義的な傾向を強め、SPD の理論と実践との裂け目が拡大し固定化されたのである。

ところで、SPD の革命的教義と改良の実践との距離がこのように大きくなるなかで、その教義を修正して理論を現実にはきつけようとする傾向が出てきた。修正派は、党が実際に行なっている、民主的改革と社会改良のための政策を強化することが社会主義の実現のために重要だとして、党の理論をそうした実践を促進するのに適合したものに修正しようとする。つまり、党の理論から資本主義の崩壊や社会革命の必然性とプロレタリア独裁に関する部分を削除することを要求する。他方、カウツキー、ベーベル等のマルクス主義正統派は、修正主義者が党の革命的戦術を脅やかしていると非難する。というのも、彼等によると、SPD の活動は社会の必然的發展方向と一致して階級対立を激化させ革命にいたらしめるものであるのに、修正派はその活動を根拠づける党の理論を放棄せよと言うからである。ところで、修正派と中央派とは、党の公式理論に関してはそのように対立しているが、党が現実に行なっている政策については両派は対立しない。同じ改良主義的自由主義的放棄策を、「一方が革命的なものとして弁護し……他方が修正主義的なものとして是認している」¹¹⁾という違いがあるだけなのだ。

ここから著者は、党の政策や行動そのものを急進化させることを要求し、組織よりも行動を重視する左派と、それ以外の部分との間にのみ、党内の真の区分線が引かれるという結論を導き出すのである¹²⁾。

11) *Ebenda*.

12) *Ibid.*, S. 17.

修正主義論争以来10年間にわたって修正派と対立していた正統派（中央派）が、プロイセン選挙法改革のための大衆ストライキ論争を契機として、漸次、左派との対立を認め、14年の戦争開始に際して修正派と結合するにいたったのは、こうした党内の真の区分線に基づいているのである。以上のように、著者は SPD の性格を理論と実践との分裂として押え、この性格を無批判的に体现している中央派と、この分裂を実践の側から克服しようとする修正派、マルクス主義の理論に即して党の実践を急進化させようとする左派との間の対立抗争として、SPD の党内史を把握する。そして、このような SPD 像を前提として、第2章以下で SPD 内諸分派の帝国主義に対する理論的認識ならびに実践的態度の同一性と差異性や、諸分派間の論争を追求するのである。

Ⅲ SPD のドイツ帝国主義に対する態度と諸潮流の帝国主義論

著者の SPD 内の帝国主義論争把握における要点は、SPD の帝国主義に対する態度を実質的に規定した中央派の帝国主義論が自由主義的立場にたったものであり、帝国主義をマルクス主義的立場から把握し、それに対決したのは左派のみであったという事である。

著者は帝国主義の諸政策に対する1890年代の SPD の態度を特徴づけて、経済政策的には自由貿易主義、外交政策的には平和主義、国内では軍備政策に対する反対などを挙げ、「帝国主義の諸政策に対する自由主義的批判」¹³⁾であったとする。ところが、19世紀の末以来、修正主義者がこうした党の態度を捨てて帝国主義の諸政策を是認する態度をとるようになったので、党内に、帝国主義をどのように把握し、それにどのように対処するのかという問題をめぐって論争がおこなわれるにいたった。

著者によれば、修正派の帝国主義論の特徴は、帝国主義が資本主義の必然的な発展の結果であることを認めたが、同時に、この帝国主義の海外膨脹政策を是認した点にある。資本主義の高度の発展は、その必要とする原料供給地と製品販路の拡大を前提しているから、植民地膨脹は資本主義の必然的な要求である。ところで、修正派は、このように現代の植民政策が「歴史的に必然的なものであり、経済的に根拠がある」¹⁴⁾と考えるので、それに反対しない。彼等は、帝国主義のもたらす弊害は改良されねばならないにしても、

13) Mandelbaum, *a. a. O.*, S. 24.

14) *Ibid.*, S. 25.

植民政策は生産諸力の発展のために必要なものだから是認すべきだと言うのである。というのも、彼等の見解によれば「社会主義は生産諸力の『組織的で』破壊されることのない高度の発展の成果なのであり、生産諸力の発展は社会民主党があらゆる経済政策を提案する際の目的でなければならぬ」¹⁵⁾からである。こうして、修正派は資本主義の新現象を必然的なものと見た点で秀れていたが、同時に、この必然性をそのまま是認するという、必然性の機械的非弁証法的理解¹⁶⁾に陥っていたのである。

他方、修正派の帝国主義に対する実践的態度はどんなものだろうか。修正派の大部分の者は積極的に帝国主義に迫従したのであり、ベルシシュタイン、クエッセル等も、一方では、海外膨脹政策や国内の軍備維持に賛成するが、他方では諸国民間の平和維持を追求するという矛盾した態度をとったのであった。こうして、著者は修正派の帝国主義に対する理論的認識ならびに実践的態度の性格が、「帝国主義に対して根本的に対抗する立場を放棄した」¹⁷⁾ことにあとと評価する。

これに対して、中央派と左派とは帝国主義に対してどのような態度をとったのだろうか。中央派と左派はともに帝国主義を否定するという立場をとった。そのかぎりでは両派は共に修正派と対立している。しかし、同じように帝国主義を否定する態度をとるにしても、両派ではその態度を基礎づける帝国主義論が違っているし、従ってまた、帝国主義に対する政策が全く異なってくる。

著者によれば、左派の帝国主義論の特徴は、帝国主義が資本主義の必然的な発展段階であり、しかも資本主義発展の最終局面であると見なし、それに対して社会主義を対置することにある。こうした観点から、ヒルファーディングとR. ルクセンブルクの帝国主義論を左派の理論として取り上げている。ここでは後者について紹介しよう。

ローザによれば、帝国主義とは、資本主義の非資本主義的社会構成体への不断の膨脹傾向が最高度の段階に達し、いくつかの先進資本主義諸国家が自国資本主義の発展のために非資本主義的地域を暴力的に奪い合うという段階における、資本蓄積の方法である。そして、資本家階級は帝国主義において自己の経済的支配と資本蓄積のための諸条件を作り出すのであるから、帝国主義は資本主義の必然的な発展の一時期である。しかも、帝

15) *Ebenda.*

16) ルカーチ、前掲書、p. 19.

17) Mandelbaum, *a. a. O.*, S. 31.

国主義は非資本主義的社会構成体地域を収奪し没落させることによって、資本蓄積を限界にまで近づけるものであるから、帝国主義は資本主義の最終局面である。ところが、資本主義の必然的な発展段階としての帝国主義が、資本蓄積の限界をつくりだし、生産力のこれまで以上の進展を不可能にしているという認識からは、「社会主義が緊急のものになっていることを理論的に確信せざるを得ない。」¹⁸⁾ こうして、ローザは、帝国主義が生み出す恐慌や戦争などの危機を利用して、社会主義革命を志向すべきだという結論を導き出す。他方、左派の帝国主義に対する実践的態度（政策）は、こうした帝国主義論に照応して、帝国主義の対外政策を全く否定し、それに協力することを拒否するといったものであった。

ところで、中央派の帝国主義に対する理論的認識ならびに実践的態度はどうだっただろうか。著者は、中央派の帝国主義論の特徴を、帝国主義が資本主義経済の必然的な現われではなく資本主義が取り得るいくつかの政策の1つであるから、帝国主義の諸政策のかわりに自由主義の諸政策をおきかえることが可能であると考えて、帝国主義に対して自由主義的な対外政策・経済政策を対置し政策の転換を要求したという点で押えている。そして、中央派の代表としてカウツキーの帝国主義論をとりあげている。

著者によれば、カウツキーの帝国主義論の性格は、純粋な資本主義的生産様式の観点から見て帝国主義が非合理的なものであることを証明しようとする点で、シェンペーターと同様に自由主義的理論家の立場に立ったという点にある。彼は帝国主義を「絶対主義的封建的政策の復活したもの」¹⁹⁾と捉え、産業資本主義制度と矛盾する「先祖帰り」²⁰⁾の政策だと見なしている。

ところで、カウツキーの帝国主義論の中心点な主張点は、帝国主義が現存の資本主義社会の枠内で克服されうるといふ点にある。彼は、資本主義が経済的に膨脹するには2つの方法があり、その1つは現代帝国主義がとっている強力政策による暴力的非民主主義的方法であるが、もう1つは門戸解放政策や自由貿易政策などの平和的民主主義的方法であると考えた。前者の方法は暴力的な植民地膨脹や保護関税政策を含み、諸国民間の対立を激化させ戦争の原因になるし、また国内的にも産業資本主義の発展にとって必

18) *Ibid.*, S. 43.19) *Ibid.*, S. 40.20) *Ebenda.*

要な規則的で秩序ある環境を混乱させるものであるから、後者の平和的民主主義的な方法に転換されるべきである。そして、このことは帝国主義が政策であるから可能であると、カウツキーは考えるのである。

さて、こうした政策の転換が当時のドイツ社会において可能なのは、どのような根拠によるのか。カウツキーは帝国主義の起源を金貸業者と銀行家との小さなグループから成る金融資本にもとめる。この金融資本は軍国主義者・官僚・主農派・教会と結びついて国家権力を掌握しているが、この「ツンフト的官僚的軍事的な絶対主義」²¹⁾という性格をもつ国家権力が推進する政策が帝国主義なのである。しかし、この金融資本は資本家階級の中でも前近代的で戦争好きな「社会の戦争階級」²²⁾であり、このグループの利益は総資本の利益とは一致しない。というのは、資本階級の中でも産業資本家は、諸国民間の平和や議会制民主主義の制度による絶対的国家権力の制限、安価な政府、自由貿易などを好み志向する傾向があるからである²³⁾。こうして、カウツキーは金融資本と産業資本との間に利害の対立と政策の相異とがあると見ていたので、そうした自由主義的な産業資本家層と労働者階級及び広汎な中間層の協力によって、現存社会秩序の枠内で帝国主義を克服することができると考えたのである。

ところで、以上のようなカウツキーの帝国主義論に対して、著者は「彼は根本的に修正主義の地盤にたっている」²⁴⁾と評価する。というのも「カウツキーが帝国主義の弊害に対して規則的で『正常な』資本主義を対置した時、彼の論議はブルジョア的諸関係に対してでなく、いわゆるブルジョア的諸関係の歪みに対してのみ向けられた」²⁵⁾からである。こうして、中央派は右派とともに、帝国主義に対して、自由貿易政策や「軍備縮小、文化諸国家の連合、すべての国際的葛藤の仲裁裁判による調停」²⁶⁾等の改革プログラムを提起するという実践的態度をとったのである。更に、帝国主義に対して改革プログラムを提起することと、それに対して全面的に対決することの違いに加えて、民族問題と戦争の問題における違いがあった。中央派は「正当な民族利益」と「不当な民族利益」

21) Wilfried Gottschalch, *Strukturveränderungen der Gesellschaft und politische Handeln in der Lehre von Rudolf Hilferding*, Berlin, 1962, S. 89.

22) Mandelbaum, a. a. O., S. 39.

23) Gottschalch, a. a. O., S. 89.

24) Mandelbaum, a. a. O., S. 44.

25) *Ebenda*.

26) *Ibid.*, S. 46.

及び「攻撃戦」と「防禦戦」とを区別するという民族主義的立場²⁷⁾のために、帝国主義戦争を誤って是認することになったが、左派は帝国主義時代の戦争はすべて征服戦争であり、この戦争においては祖国ではなしに社会主義が防衛されるべきであるという国際主義的立場に立ったので、帝国主義戦争に反対することが可能になったのである。

以上のように SPD 内の帝国主義論争を検討することによって、著者は、14年における SPD の戦争に対する態度を決定した事情の一つを明らかにすることができた。すなわち、SPD を指導する中央派のカウツキー主義は、資本主義の帝国主義への発展という事実について明確な認識を持つことができず、また帝国主義に対して自由主義的な改革案を対置するにとどまったために、結局は帝国主義に公然と追従する者もいた修正派と結合し、帝国主義戦争を是認するにいたったのである。

IV 本書の意義と限界

大戦前及びこの論文の書かれた時代にドイツで一般的に流布していた SPD 像は、SPD が革命的な社会主義政党であり、その内の中央派は「マルクス主義正統派」として修正派とは対立する立場に立っていたとするものであった。しかし、こうした SPD 像を描くことによって、SPD の戦争への加担とかドイツ革命の敗北の根源的理由を説明することは出来ない。本書は、この旧来の SPD 像を SPD 内の修正主義論争・帝国主義論争を検討することを通じて批判し、戦前期 SPD が実践的には改良主義政党であったのであり、中央派は自由主義的立場とマルクス主義的立場との間を動揺して実践的には修正派と一致する体質をもっていたのだ、という新しい SPD 像を打ち出したのである²⁸⁾。この SPD 像が、ローザやレーニンの SPD 批判をふまえていることは明らかであるが、SPD の理論と実践とに内在してその像を明確にしたことは、本書の秀れた点だと言えよう。

次に、本書の SPD 内帝国主義論争観については、こうである。著者によれば、帝国主義に対する認識については、「修正主義者の一部と急進主義者達が、資本主義の帝国主義への発展を重要な点については正しく判断していた」²⁹⁾ のであって、中央派は帝国

27) *Ibid.*, S. 51 ff.

28) Mandelbaum, a. a. O., SS. 19, 24, 37; Fränkel, a. a. O., SS. 17-48.

29) Mandelbaum, a. a. O., S. 57.

主義の国内政治や対外政策における強力政策と、資本主義の独占的組織及びその経済的膨脹とが必然的に結びついていることを正確に認識してはいなかったのである。他方、帝国主義に対する実践的態度に関しては、中央派は、その帝国主義観に照応して、帝国主義の諸政策に自由主義的諸政策を対置するにとどまったため、結局は帝国主義に対して根本的に対抗する立場を放棄した修正派と結合してしまったのである。こうして、中央派が帝国主義に対する理論的ならびに実践的態度について、修正派同様に革命的マルクス主義の立場にたたなかったと主張することが、本書の第2の積極的な点だと言えよう。

以上のような積極的な意義が認められる反面、本書には幾つかの一面性があると思われる。まず、SPD及びその中の中央派と修正派が社会主義の立場に立たなかったと批判する、著者のSPD像からは、ドイツの労働者階級が担っていた2つの課題、つまり前近代的な社会諸関係の民主的改革という課題と資本主義を変革する社会主義的課題³⁰⁾とを、SPDがいかなる形で結びつけようとしていたのか、また結びつけるべきであったのかという問題視角は抜け落ちているのである。このことと関連して、著者にはドイツ帝国主義における封建的要素と資本主義的要素とのからまりをどう把握するのかという、ドイツ資本主義の特質を考慮しようとする問題意識は欠けており、前近代的要素はほとんど無視されている。だが、ドイツ帝国主義は前近代的要素を含んでいたものであり、著者の依拠しているR.ルクセンブルクにおいても、帝国主義に対する階級的見地からの闘争と、プロシアの三級選挙法をはじめとした前近代的政治制度に対する急進民主主義的反対運動³¹⁾とは不可分のものとされていたのである。従って、抽象的に社会主義の立場になったのかどうかという点からSPDの各潮流を断罪するのではなく、ヴィルヘルム帝制下のドイツ社会をどのように把握したのか、その中で労働者が担わなければならない2つの課題をどのように結びつけようとしたのか、そうした具体的な次元での違いに従って諸潮流の個性を明らかにすべきだっただろう。そして、中央派が修正派と違った帝国主義分析を持っていたにもかかわらず、帝国主義に対する政策において修正派と結びつくにいたった根拠は、理論が政策に具体化される時の媒介項となる運動主体の思想的体質において、両派に共通するものがあつた³²⁾ことに求められるべきである。

30) 河合栄治郎『選集』第1巻、第4篇参照。

31) 平井俊彦「ウェーバーの民主主義」(出口勇蔵編『経済学説全集』6、所収) 297頁。

はじめに述べたように、本書は帝国主義論争を取り扱う際に帝国主義に対する各潮流の理論的ならびに実践的態度の総体を分析しようとするが、その際、力点は実践的態度(政策)におかれているため、政治論を取り扱った論文という性格を持っている。また、帝国主義に対して真に対決する社会主義の立場をとったのは左派だけであったと強調するあまり、左派の帝国主義論が絶対化され固定化されてしまっているように思われる。こうした事情のために、SPD 内の各潮流及び個々の理論家の帝国主義論が持つ個性は、一面的に捉えられた。たとえば、左派の帝国主義に対する闘争は前近代的諸制度に対する闘争と結びついていたのであり、この結びつきを捨象して、帝国主義に反対する社会主義の立場を強調することによって、左派の帝国主義論の真の姿は一面化されてしまうだろう。また、修正派の理論家、ことにベルンシュタインは、ドイツの前近代的な諸制度に反対する民主主義的改革のための活動を意欲的に押し進めることを強調したが、こうした主張は著者の立場からは検討されることもなかったのである。更に、著者は帝国主義に対して自由主義的批判を行なう点でカウツキーがシュンペーターと類似していると特徴づけているが、労働者と自由主義的資本家、中間層の協力によってドイツ帝国主義に政策転換をせまろうとするカウツキーと、イギリスなどの先進資本主義国を基準にドイツの後進性を批判するシュンペーターとでは、その帝国主義論のもつ個性は異なっているとされねばならない³²⁾。SPD の個々の理論家の帝国主義論や帝国主義のもたらした諸問題をめぐる論争を研究して、上に述べたような一面性を克服し、SPD 内の帝国主義論争をレーニンやホブソン等を含むより大きな帝国主義論史の中に組みこんでいく作業が、残された問題であるだろう。

32) 山口和男「ドイツ社会民主党の農業論争」(『思想』1965年4月号、所収)27頁。

33) 内田等編『経済学史講座』3、第4章 シュンペーター(伊藤光晴)。